
もうじき目白は創立 50 周年

西 正子

目白山岳会は来年 2023 年 10 月で、創立 50 年をむかえます。平凡な会がここまで続けられたのも会員の「地道な努力があってこそ」だと思います。そこでこの節目の時期、目白の辿ってきた道を、過去の会報を参考に、私なりにまとめてみました。

◆はじまり、はじまり//昭和 48(1973)年～◆

目白山岳会は昭和 48(1973)年 10 月、豊島区目白にあった日本造船技術センターの職場の登山愛好会として発足しました。会員数は 12 名で、島崎達雄さんはこの時の創立会員です。初めての山は「大菩薩峠」でした。当時の規約には「山行は縦走とハイキングに限る」とうたわれており、バリエーションは禁止されていました。

職場の仲間と山を楽しんでいましたが、年々高齢化が進んだため、外部からの入会を受け入れ、雪、岩、沢など、さまざまな登山のできる山岳会へと姿を変えることになったのです。

労山に入ったのは昭和 48(1973)年 12 月です。「登山技術の習得や、万一への対策も必要」と組織への加入を検討し、加盟を決めました。

◆だんだん山岳会らしくなってきた//昭和 52(1977)年～◆

昭和 52(1977)年、一般の人を取り込み、社会人山岳会へと一歩を踏み出しました。現在まで堅実な活動を続ける横堀直人さんは、この時期、新聞募集を見て入会したひとりです。

大学山岳部出身のいわゆる「技術のある人」も入ってきました。一般縦走と並行して、滝谷第四尾根、北岳バットレス、コブ尾根などの登攀が行われ、春・夏・正月の合宿が定期的な行事になりました。

社会人山岳会として形が整ってきたこの時期は「大人数・大型山行」が盛んでした。昭和 53(1978)年、54(1979)年、夏の穂高の登攀・登頂に 8 名が参加。58(1983)年お盆には、北ア・黒部川源流～三俣蓮華岳(6 名)、槍～穂高(4 名)、越後三山(7 名)で同時合宿を行いました。ゴールデンウィークにも 59(1984)年・尾瀬(8 名)、61(1986)年・巻機山(11 名)で、歩きと山スキーを楽しみました。ちなみに西 明彦さんは昭和 57(1982)年の入会です。会員の要望に応じてリーダー部主催の雪訓や読図の練習をした熱い時代でもありました。

◆志向の多様化と個人山行、そして停滞期へ // 昭和 60(1985)年頃～◆

しかしこの流れも昭和 60(1985)年頃から変化が出てきました。仕事、結婚で、力のある会員がひとりふたりと会を去り、まったくの初心者や女性の入会が増えてきたのです。装備の購入からはじめ、日帰りや小屋泊りのハイキングが主体になりました。もちろん沢や雪山、山スキーなども行われていましたが、それは限られた会員の個人山行として定着したのです。

もうひとつ加えたいのは、斎藤亘さんがフリークライミングを勉強し、会に啓蒙したことです。従来の岩登りにはない華麗なムーブに、一同目を見張りました。平成に入るとフリー愛好家の入会が相次ぎました。そしてフリーの人はフリーに専念するため、活動の個人化にいつそうの拍車がかかりました。

この流れは、交通手段の変化とも関係しています。集団で登っていた時は、ほとんどが電車利用でした。ところが個人山行が多くなる頃から、小回りのきく自家用車がふえてくるのです。もちろんその背景には、山岳夜行列車が相次いで廃止された一方、高速道路が飛躍的に発達した事情もあるのですが・・・。

個人山行の増加は、会員間の力量差が大きくなり、志向が違って来たことを意味します。年齢が20～50代に広がり、職業、休日、家庭の事情も違います。そして何よりやりたいことが異なるのですから、以前のようにみんなで「ワーッ！」と合宿で盛り上がるには無理があります。

平成元(1989)年から島崎達雄さんが3代目の会長になるのですが、平成4(1992)年の夏合宿は葛根田川(沢)と蓼科山(ハイク)の2つに分けて行いました。

昭和の終わりから平成の頭にかけて、会は停滞期に入りました。例会出席者も少なく、山行数も1、2件がせいぜい。初心者を指導する人もいなくなりました。

会活動は連動しています。計画が多ければ、山行も増え、例会も活発になり、入会者も増えてきます。しかしこの時期は、すべてがダメだったのです。

◆百名山と中高年の台頭 // 平成5(1993)年頃～◆

こうした時にNHKテレビで百名山が放映され、一大ブームとなりました。

その影響もあったのでしょう。平成5(1993)年頃から百名山を目指す中高年の入会が目立ってきました。9年がかりで達成した井上ミチコさんはその代表です。

百名山には岩、沢、長時間歩行・・・さまざま要素が詰まっています。毎週毎週百名山とトレーニング・・・。クライミングジムも一般的になり、雨天の休日には誘い合っただけの練習です。熱烈パワーは会の山行数を増やし、以後多くの会員が百名山に登頂しました。

その他、沢や雪へとステップアップを目指す入会者、子育てが一段落して登山を再開した会員・・・徐々に役者が揃い、会は賑わいを取り戻してきました。

40代が多く、皆元気いっぱいです。「仕事を終えた夜、車で登山口まで走り、翌早朝から登山を開始。一日めいっぱい歩いて、夜遅く帰宅」・・・弾丸登山が続きました。分厚くなった会報は「山と溪谷」「岳人」「登山時報」に紹介され、なかでも「今月のわたしのワンショット/岳人写真倶楽部」では掲載常連山岳会となりました。

子連れハイキングも盛んで、平成13(2001)年8月には、大源太キャニオンキャンプ場で、総勢14名の目白祭を開催。登山の合間に、ボート遊びや花火大会を開き、大人も子どもも大はしゃぎ！素朴なクレヨン画や楽しい作文が会報に載ったのもこの頃です。

会社の保養所などもうまく利用できる時代で、家族も一緒にお安く登山、冬には苗場でスキー三昧でした。

会員数は 15~20 名前後で推移していましたが、入会。退会、常に出入りが多い状況が続きました。なにしろ働き盛りなので、転勤などで継続が困難になるケースが少なくなかったのです。

「カモシカ」や「秀山荘」に会員募集ポスターは貼り出していましたが、さらに「山と溪谷」に、平成 13(2001)年から 3 年間、年 3 回の募集広告を掲載。問い合わせ者がすぐ参加できるよう、あらかじめ、たくさんの山行計画を用意した結果、年間 20 名以上の例会見学を受けるまでになりました。

ちょうど電子メールや携帯電話の普及も進んできて、連絡がスムーズになったのも追い風でした。

◆バイタリティーあふれる黄金期 // 平成 16(2004)年頃~◆

努力の甲斐があり、仕事が一段落した人が大量入会しました。一般登山からもう一步踏み出したい人、ブランクはあるものの若い頃に技術を磨いた人など、50 代の新人達です。

ハイク、縦走、沢登り、雪山、山スキー、溪流釣り・・・。1 ヶ月に 10 以上の山行が行われ、多くの人に参加しました。特に、五日市の沢が定番になった「クリーンハイク」や「1 泊交流ハイク」などの行事には常に 8 割以上が出席。平成 18(2006)年 12 月 9 日~10 日で行われた天覧山・岩トレには 19 名の会員全員が集まって、大盛況でした。

テント、ランタン、コッヘルなども毎年のように新調し、まさに黄金時代です。

労山の登山学校に入る人も多く、会の中でも、ビバーク、沢トレ、雪洞など切磋琢磨。例会でも毎回勉強会を開き、数年後には、新人同士で、雪のハヶ岳や奥秩父の沢に挑戦するほどになりました。

平成 19(2007)年、5 代目会長になった斉藤亘さんは、会員の気運を読み取り、平成 20(2008)年ゴールデンウィークに、妙高・火打山(歩き・スキー 10 名)、平成 21(2009)年同時期に、大雪溪~白馬岳・杓子岳・鑓ヶ岳~柵池(歩き・山スキー 11 名)を実行し、白銀の世界を案内しました。

対照的に、企画担当の井上順一さんはアイデアマンそのもの・・・。芋煮や天ぷらをつくる「グルメ登山」、「ヤブ山読図登山」、食事は小屋に頼む「軽量テント山行」、山頂から初日の出を拝む「ご来光ハイク」など、次から次へとおもしろい計画を練り出しました。

中でも「夜行バス+レンタカー+キャンプ場テント+登山+観光」をセットした「格安遠方登山」は傑出していました。「八甲田山・岩木山+ねぶた祭・斜陽館」「石鎚山・剣山+子規記念館・松山城」など、ふだん行けない山域を堪能しました。(運転手だった横堀さん、お疲れ様でした)

しかし、よいことばかりではありません。山行が増えるにつれ・・・ヒヤリハット・・・ちょっとした事故・・・とつづき・・・とうとう平成 19(2007)年、日和田の岩トレと尾白川沢登りで、ヘリを要請する事故が 2 件発生してしまいました。幸い命を失うことはなかったものの、衝撃的なできごとでした。

会務関係で会を支えているのが斉藤整紀さんです。平成 21(2009)年から事務局長をつとめ、27 名(平成 22(2010)年)になった大所帯をまとめながら、新しい「目白山岳会規約」を作成、会の指針を再構築しました。平成 26(2014)年には、嶋田 優さんがホームページを開設。「山行」と「運営」双方が骨太になり、力強い山岳会へと変貌です。

しかし平成も 20 年代後半になると、活動に陰りが生じてきました。「目標が一段落」「家族の介護」「病気」、さまざまな理由で退会者が増えたのです。会員数も 14、5 名になってしまいました。

ゴールデンウィーク合宿も、平成 26(2014)年の「常念・蝶・六百山・焼岳・徳本峠(10 名)」が

最後になっています。これも、「①各人都合のよい日に入山、②チームごとに登山③上高地で合流打ち上げ、④その後も山に行ったり、温泉に入ったり、各自のスケジュールで下山」という縛りの少ない合宿で、数年先には明確になる、志向の細分化を予見するような登山となりました。

◆より低く、より幅広く // 平成 27(2015)年頃～◆

60 歳の節目をむかえる人が増え、仕事も「リタイア」「アルバイト」「フルタイム」など千差万別です。生活が変われば、目標、気力、気持ちなどに大きな変化が出てきます。

6、7 時間歩行もめずらしくなかった会山行は、しだいに 4 時間前後で定着し、平日登山、家族や元会員とのハイキングも発表されるようになりました。弾丸登山は姿を消し、スケジュールに余裕をもった登山が目立ってきたのです。

平成 27(2015)年から 4 年にわたり、白井達也さんリーダーで朝日・飯豊・蔵王など、避難小屋泊の東北縦走が実施されました。往路こそ夜行バスで大変ですが、最終日は温泉宿に泊まって新幹線で帰宅という、若い時より「1 泊多い」やり方でした。

また「大人の遠足合宿」と称する「朝発 1 泊 2 日の低山縦走」も企画され、伊豆や秩父、蛾ヶ岳などへ足を運びましたが、こちらの方も「登山時間」よりも「宴会時間」が長く、「若さがほんとうにさようなら」したことを実感しました。

相変わらず、雪山や八甲田山スキー、奥根・水長沢、南ア・赤石沢などの沢登り、マイナー登山も行われていましたが、参加者は激減で、「バリエーション」は完全に個人山行となったのです。

平成 29(2017)年、会報・山脈に「富士山村山古道(154 号)」「川中島、古城・古戦場めぐり(155 号)」が相次いで発表されました。両者とも登山ではなく、歴史ウォーキングです。そして以降、「旧跡めぐり」「お遍路」「災害ボランティア」など、幅広い分野にわたる報告がされるようになりました。

◆目白の中の労山活動◆

目白山岳会は当初「東京都北部協議会」に所属していました。その後「東京都北部連盟」が立ち上がり、練馬区、北区、板橋区、豊島区に基盤をおく 10 以上の会が所属し、大塚に事務所を構えていました。会のつながりは密接で、毎年 12 月には合同でバスをチャーターし、富士山で雪訓を行っていました。会をまたいで親しくなった人どうしの登山、結婚にもつながりました。

一般の人を会費制で募集する「バスツアー」もたびたび企画しました。ハイキングやスキーを楽しんでもらう行事ですが、昭和 54(1979)年には金時山へ 46 人、55(1980)年幕山へ 33 人、58(1983)年戸狩スキー場へ 34 人を連れて行き、ずいぶん喜ばれたものです。

同じく 58(1983)年には「上越線山岳夜行廃止反対運動」を行い、島崎達雄さんが代表を務めました。毎週末、上野、新宿駅でピラを配り、最終的に 2000 名の署名を提出し、丸ビル国鉄本社で交渉が行われました。この時代は身軽な 20～30 歳代が多かったので、団結した行動がとれたのです。

でも一番の活躍者は、昭和 57(1982)年に入会、平成 5(1993)年に亡くなるまで「全国女性部会」で委員を務めた森美智代さんでしょう。とかく制約の多い女性が、どうしたら登山を続けられるか考えつづけ、全国を飛び回っていた人でした。北岳に登った時、見知らぬ男性の「女が来るようじゃ、南

アルプスもおしまいだ」という発言に、猛烈に抗議したエピソードも残っています。

平成元(1989)年、北部連盟は「豊島区連盟」へと形を変えました。所属は東京雪稜会と目白山岳会の2会で、平成4(1992)年まで「小川山・豊島区連盟祭(8月)」、「都民ハイク(10月)←都民を山に案内して、自然を体感してもらう」を計画して、合同でフリークライミングやハイキングを楽しんだりしました。

その後、平成11(1999)年には、東京雪稜会(45名)、目白山岳会(19名)、朋友山好会(6名)、森の登会(12名)の4会所属となり、同年8月には久しぶりの豊島区連盟会議が開かれました。秋の都民ハイクや、翌年のクリーンハイクは合同で実施しましたが、年齢や考えの違いから、それ以上の発展はありませんでした。現在は目白単独で「クリーンハイク」を、「都民ハイク」は「目白交流ハイク」に姿を変えて継続しています。

◆海外登山◆

目白ではじめての海外登山報告は、昭和58(1983)~59(1984)年お正月の「ブータンヒマラヤ・トレッキング/労山ブータン・ナムシラ遠征隊支援活動」でした。海外登山の環境が整い、労山でもヒマラヤ遠征などが次々開始された時期と重なります。

平成6(1994)年、西明彦さんが4代目会長になった頃から、目白でも海外登山が盛んになってきました。ヨーロッパ(モンブラン、マッターホルン他)、北米・中米(ヨセミテ、トルーカ山)、アジア(ネパール、カラコルム、キナバル、雪岳山)など、毎年のように会員が外国に飛び出しました。

会としては2回。平成7(1995)年ゴールデンウィークの「ネパール・ゴラパニ峠トレッキング9日/10名」と、平成12(2000)年末~13(2001)年正月の「トルーカ山登頂6日/9名」です。両者とも場所こそ一般的ですが、細部は目白に合ったオリジナルプランでした。会山行ができたこと、そして会員の視野が世界へと広がったことに価値があると思います。

「キナバル山(4095m)」には、ツアーなどを利用して多くの会員が登頂しています。日本から近く、山小屋1泊2日で4000mを体験、食事や観光も楽しめるので人気山岳です。

平成28(2016)年以降、「ウズベキスタン」「北イタリア」「台湾」「ベトナム」など、外国旅行の発表が増えてきました。これは国内でも会山行がさまざまな「歩き」に広がってきた時期と合致します。

◆会報【山脈 やまなみ】◆

まず「山脈(やまなみ)」の名称から・・・これは、初代編集長の国生義秋さんの奥様の故郷、九州の「やまなみ」ハイウェイからヒントを得た、と伝わっています・・・

基本的に、今日まで山行報告を中心に例会議事録、労山や新聞・雑誌の注目記事、勉強会資料などを掲載しており、発行頻度は、年平均3~4冊になります。最多は平成14(2002)年の9冊、反対に会活動が停滞して、1冊も出せない時期もありました。

最初は手書きのガリバン刷りでしたが、その後コピーが普及、今は印刷所に頼んでいます。その昔、担当者の家に集まり、持ち寄った原稿や写真をわいわい言いながら台紙に貼り付け、余白にイラストを描き入れたのを、昨日のこのように思い出します。

体裁もバラバラだったものを、少しずつ読みやすいものへと工夫していきました。B5 から A4 へとサイズ変更(NO146・2014/9/24)、表紙のカラー化 (NO117・2008/9/25)、などを経て、現在の形ができあがりました。

最近パソコン、メール、スマホの普及で、以前とは比べ物にならないくらい美しい会報ができあがってきます。しかし大切なのは、山に対して思いを込めた文章であることは、今も昔も変わりません。自分たちの記録を残し、皆で共有し、後から読んで懐かしむ場が「山脈」なのでしょう。

◆現在、そして今後へ // 令和 4(2022)年～◆

できないことを手放し、健康に気を付けて今を楽しむ…。これからの目白に必要なことでしょう。

この数年、コロナで活動がむずかしい中、現在会員は 12 名です。全員元気で、半数が 70 歳を過ぎた会としては、良い状態だと思います。

日帰りハイクが主流になってきた現在、これからの目標は「いつまで続けられるか」でしょう。

目白の特長は「全員が精神的に平等」の一言だと思います。新人もベテランも技術のある人もない人も皆平等。各自、自分の得意分野で主人公になれるのが 50 年続いた理由でしょう。

会が衰退の危機に陥ったこともありましたが、その時には、山行にしろ、運営にしろ、会を引っ張る救世主がいつの時代も出てきました。50 年間の入会者 200 名の力の結集が、今の目白山岳会です。

会の発展は、会員ひとりひとりの山に対する情熱にかかっています。今後お互いに協力して、豊かな登山を目指していければと思います。

